

U.S. MEDIUM TANK **M4A3E8 SHERMAN "EASY EIGHT"** EUROPEAN THEATER

アメリカ戦車 M4A3E8 シャーマン イージーエイト (ヨーロッパ戦線)



解説：斎木 伸生

協力：陸上自衛隊

■第二次大戦までのアメリカ軍の中戦車開発

第一次大戦後、アメリカ軍は戦車の開発に消極的で、特に中戦車は1930年代に至るまで全く保有されていなかったばかりか、1930年代になって試作されたT3やT4中戦車は、第一次大戦そのままの車輌でしかありませんでした。陸軍兵器局はこれに代えて、1936年にT5の試作を命じましたが、この戦車が後のM3、そしてM4中戦車のルーツとなつたのです。T5は1939年夏にM2中戦車として採用され、1930年代のアメリカ軍で初めて制式化された中戦車となりました。しかしこの戦車も、まだ近代的とは言い難いもので、小山のような戦闘室の周囲に多数の機関銃が装備され、その上に37mm砲を備えた砲塔が載っていました。

1940年6月、ドイツ軍の電撃戦の前にフランスが敗北すると、アメリカ軍は早急に戦車の量産に取りかかることになったのです。当初M2中戦車の量産が計画されましたが、特にその主砲は威力不足であり、ドイツのIV号戦車などに匹敵する75mm砲を装備した戦車の開発が必要とされたのです。しかし、アメリカではまだ大口径砲を全周旋回砲塔に搭載した戦車の開発を行ったことはありませんでした。このため、つなぎ役としてM2中戦車の車体を流用して、車体右側のスponsonに、75mm砲を限定旋回式に搭載した車輌が開発されました。この戦車はM3と名付けられ、1941年4月には量産が開始されました。

■シャーマン戦車の開発と発展

しかし、M3中戦車はあくまでも暫定的な戦車でしかありませんでした。このためM3の量産、配備と並行して、

新型中戦車の開発が進められました。この車輌は開発期間の短縮のため、車体下部やエンジン、動力伝達装置やサスペンション等は、M3のものが流用されていました。そこに新型の上部車体と、75mm砲を装備した大型の旋回砲塔が搭載されたのです。試作車輌は1941年9月に完成し、10月にはM4中戦車として制式化されました。先行生産型の製作は1941年11月から、そして量産型の生産は1942年2月から開始されました。最初に生産されたのは、鋳造製車体のM4A1でした。しかし、大量生産を実現するため、鋼板を溶接した車体のM4がM4A1と並行して生産されました。このM4とM4A1は航空機用を転用したR975星型空冷ガソリンエンジンを搭載。なお本車はシャーマンという愛称で知らますが、これは後にイギリス軍によって名付けられたものです。

これに続き溶接車体にゼネラルモーターズ製6046液冷ディーゼルエンジンを組み合わせたものがM4A2、溶接車体・フォードGAA液冷ガソリンエンジン搭載車がM4A3、溶接車体・クライスター・マルチパンク液冷ガソリンエンジン搭載車がM4A4となりました。最後のM4A6は車体前部が鋳造製、後半部が溶接製のハイブリッド車体に兵器局製RD-1820星型空冷ディーゼルエンジンを装備していましたが、少数生産に留まりました。これらに加えてシャーマン戦車には、生産途中での改良も加えられました。ひとつは車体の改良で、初期車体では前面上部の傾斜が大きく、ハッチ部分が膨らんでいたものが、新型車体では傾斜角が減った一枚板に変更されました。

シャーマンのもうひとつの改良点は武装でした。兵器局ではすでに1942年頃から、新型の76mm戦車砲の開発に着手していました。これはM10駆逐戦車などに搭載された3インチ(76.2mm)砲を小型軽量化したもので、シャーマンに搭載するため砲身もわずかに短縮されていました。しかしそのままでは砲塔が小型すぎて搭載が困難だったため、シャーマンの後継として開発されていた、T23試作中戦車の砲塔が流用されたのです。従来の75mm砲では通常の被徹甲弾を使用して、距離914mで厚さ60mm(傾斜角30度)の装甲板を貫徹できたのに対し、この76mm砲では同様の条件で厚さ88mmの装甲を貫徹可能。また高速徹甲弾を使用すれば実際に厚さ135mmの装甲板を貫徹できたのです。



■76mm砲搭載型シャーマンからM4A3E8へ

76mm砲搭載型シャーマンは、1944年1月に生産が開始されました。76mm砲搭載型として生産されたのは、M4A1、M4A2、M4A3の3タイプでした。当初アメリカ軍上層部はその必要性に懐疑的でしたが、1944年6月のノルマンディ上陸作戦におけるドイツ軍のパンサー、タイガーIとの戦いはその評価を一変させました。イギリスで保管されていた76mm砲搭載型シャーマンは大急ぎでノルマンディに送られ、ドイツ軍包囲網の突破をはかった1944年7月のコブラ作戦で初めて戦線に投入されたのです。

こうして車体と武装の改良が進められましたが、シャーマンにはもうひとつの弱点がありました。それは16.5インチ(42cm)と幅の狭い履帯です。夏場はこれでも十分でしたが、秋の長雨で地面が泥沼となるともはやお手上げでした。このためダックピル(アヒルのくちばし)などとあだ名された延長用エンドコネクターが使用されましたが、一時しのぎに過ぎませんでした。これは特に重量が増加した76mm砲搭載型にとっては、大きな問題でした。その解決策のひとつとして考案されたのが、23インチ(58.4cm)幅の新型履帯でした。この履帯を使用するため、新型の水平溝巻きバネ懸架装置(HVSS)が採用されたのです。

HVSSでは、これまでのVVSSが渦巻きバネを縦に配置して、2つの転輪を上下方向で緩衝していたのに対して、渦巻きバネを横に配置してストロークを拡大し、また2つの転輪を連動してスイングさせていました。そしてVVSSがシングル転輪だったのに対して、HVSSはダブル転輪で履帯幅を広く取ることができたのです。履帯には、当初鋼製シングルピンのT66、後に銅製ダブルピンのT80、ゴム被覆ダブルピンのT84が使用されました。なお履帯幅の増加に対応して、車体左右にフェンダーが増設されました。HVSS型の生産は、1944年3月第一次分としてM4A3をベースに500輌が発注されました。最初の量産車輌は1944年8月に完成し、11月より部隊への引き渡しを開始。生産数は1944年中が1,445輌、1945年4月までに1,172輌の合計2,617輌となっています(105mm砲搭載型を除く)。なおHVSS型は、その後M4、M4A1、M4A2各タイプでの生産も開始されていますが、M4A3の生産数が最も多くなっています。当初HVSS型は、23インチ幅履帯付きM4A3(76mm砲)と呼ばれていましたが、これでは繁雑なため、1945年春には型式名称からM4A3E8と呼ばれるようになりました。ただし、これでは105mm砲型も含んでしまいますが、一般には76mm砲型だけを指すものとされています。

型式名称のE8にちなんでイージーエイトとも呼ばれますが、これは戦後一般的になったものようです。

■M4A3E8の戦歴

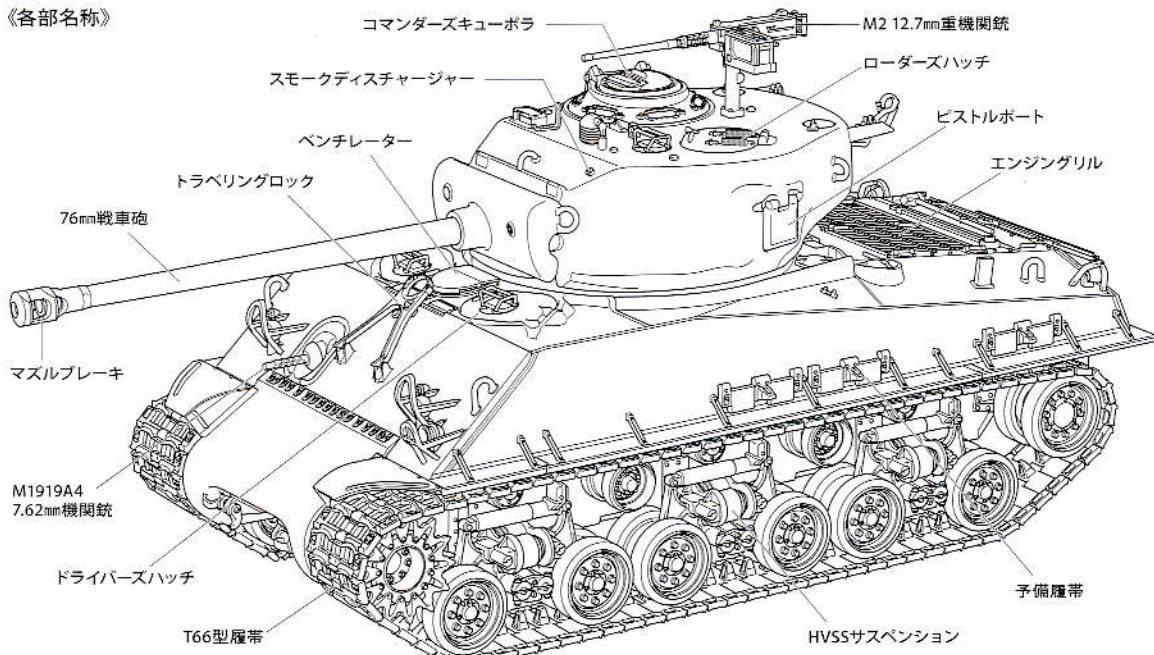
1944年11月、M4A3E8が最初に配備された部隊は第8機甲師団でしたが、同師団は翌年1月半ばまで実戦には投入されませんでした。代わって最初に実戦で使用されたのは、ドイツ軍最後の攻勢となった1944年12月のバルジの戦いの最中、12月22日にパットン将軍の第3軍に送られた21輌でした。これらは第4機甲師団に配備されて、ドイツ軍に包围されていたバストーニュの解放に向かいました。その後M4A3E8は、ラッドラー将軍隸下の第12軍集団の4個軍に補充として配属されたことが知られています。その数は第1軍が258輌、第3軍が前記の21輌を含め256輌、第9軍が214輌、第15軍が24輌の合計752輌でした。その他イタリア戦線には、戦争終結直前に少数が到着。M4A3E8はヨーロッパ戦線での連合軍の勝利に貢献したのです。

第二次大戦の終結とともに、アメリカ軍は急速に動員解除を進め、M4もその多くが第一線から退きました。このため1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、アメリカ軍は大急ぎで設備をかき集めることになりました。南進する北朝鮮戦車部隊との最大の戦車戦は、1950年の8月から10月にかけて展開されました。そこで北朝鮮軍のT34/85を迎撃ったのは、急ぎ投入されたM4A3E8だったのです。また、戦後日本では自衛隊が創設されますが、その創成期の戦車装備として246輌ものM4A3E8が供与されています。第二次大戦終盤に登場し、大戦終結後も使用されたM4A3E8は、アメリカ軍におけるM4戦車系列の最終発展型となった、まさにシャーマン戦車の集大成といえるでしょう。

■M4A3E8 シャーマン 諸元

- 全長：7,543.8mm、●全幅：2,997.2mm、●全高：2,971.8mm
- 全備重量：33.657トン、●乗員：5名
- エンジン：フォード GAA 4ストロークV型8気筒液冷ガソリンエンジン
- 出力：500馬力/2,600回転、●最大速度：41.8km/h
- 航続距離：161km(路上)
- 武装：76mm戦車砲 M1A1またはM1A1CまたはM1A2×1、12.7mm M2重機関銃×1、7.62mm M1919A4機関銃×2
- 弾薬搭載数：71発
- 装甲厚：[車体] 前面上部63.5mm、前面下部107.95～50.8mm、側面38.1mm、後面38.1mm
[砲塔] 防盾88.9mm、前面63.5mm、側面63.5mm、後面63.5mm

《各部名称》



■ Behind the Game

The U.S. was somewhat reluctant to develop new tanks in the years following WWI; indeed, the T3 and T4 medium tank prototypes developed in the 1930s were basically WWI-era designs. Eventually with the M4 Sherman, however, the U.S. hit upon an iconic and enduring medium tank. It had its roots in the M2 medium tank that was officially designated in Summer 1939.

Although it was tabbed for mass production, the devastatingly swift conquest of France by the German forces in June 1940 made it clear that the tall, bulky M2 and its 37mm main gun were obsolete. The Allies needed a tank with firepower in the league of the German Pz.Kpfw. IV's 75mm gun. Without experience of developing a fully rotating turret for such a large caliber gun, U.S. designers pressed the M2 hull back into service, with a 75mm gun housed in the right-side sponson. Named the M3, it entered production in April 1941.

■ Playing Catch-Up: Development of the Sherman

Even as the stopgap M3 was being produced, a new medium tank was under design. To conserve development time, it used the M3 suspension, lower hull and transmission, with a new upper hull and fully rotating turret for the 75mm gun. It was fast-tracked from prototype (September 1941) to official designation as the M4 (the Sherman nickname was later given by the British military) in October 1941 and mass production from February 1942. First to be produced was the cast hull M4A1 variant, joined by the mass production-oriented M4 with welded hull. Both used the R975 radial gasoline engine. More welded hull Shermans followed, with different

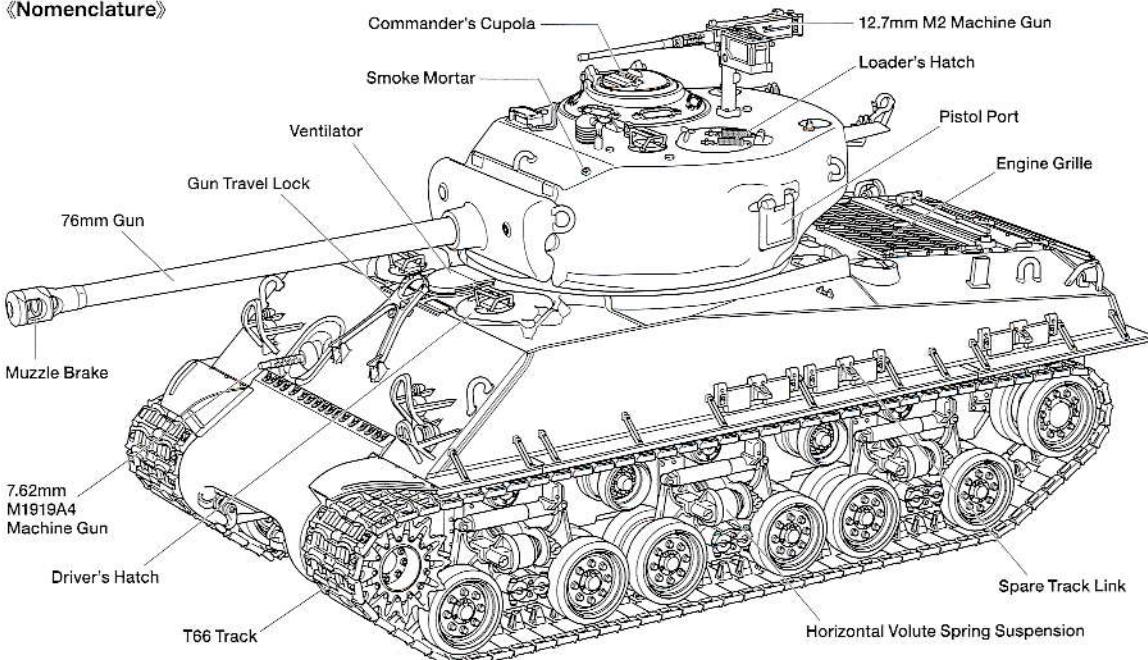


powerplants: the M4A2 had a General Motors 6046 diesel; the M4A3 sported a Ford GAA gasoline powerplant; and the M4A4 had a Chrysler multibank gasoline unit. A cast/welded hybrid hull variant with RD-1820 radial engine was also produced as the M4A6.

Some later Shermans were upgunned, with a new 76mm weapon and larger turret to accommodate it. A shortened and lightened version of the 3-inch (76.2mm) gun from the M10 tank destroyer, at 914 meters it could penetrate 88mm of 30-degree armor, compared to the 60mm limit of the 75mm gun.

U.S. MEDIUM TANK M4A3E8 SHERMAN "EASY EIGHT" EUROPEAN THEATER

《Nomenclature》



■ An Easy Rider

Despite some skepticism as to the necessity, 76mm turret M4A1, M4A2 and M4A3 Shermans were manufactured from January 1944. Meeting the formidable Panther and Tiger I after the June 1944 Normandy landings soon washed away any such doubts, however, and 76mm turret Shermans were thrown into action in Operation Cobra that July.

Heavier armament came at a price, though, as the Sherman's 16.5-inch (42cm) tracks struggled with the weightier turret in muddy conditions. Temporary solutions such as "duckbill" end connectors were tried; a more permanent fix was wider 23-inch (58.4cm) tracks (and hull fenders) with horizontal volute spring suspension (HVSS) in place of the hitherto-used vertical (VVSS) setup. Placing the volute spring in each bogie horizontally allowed dual road wheels and the use of wider tracks: first, the single-pin T66 type and later the double-pin T80 steel and T84 rubber-covered tracks. 500 HVSS-equipped M4A3 tanks were produced between March and August 1944, and delivered from that November, a figure rising to 2,617 by April 1945. They came to be known as the M4A3E8, and more commonly the "Easy Eight" thanks to the smooth HVSS.

■ The Easy Eight in Action

December 22, 1944; the Battle of the Bulge saw the Easy Eight's first battle action, 21 of them in the 4th Armored Division of General Patton's 3rd Army at Bastogne. Later, they were assigned in greater numbers, to the 1st Army (258), 3rd Army (256), 9th Army (214) and 15th Army (24) under the auspices of General Bradley's 12th Army Group, and also saw limited action in Italy.

The Sherman's enduring design is testified to by its long career, and as its final variant the Easy Eight can perhaps be seen as the most refined. Post-WWII, it was deployed to stem the advance of North Korean-operated T34/85s in the Korean War. Japan and the Easy Eight also have a close connection, as in the 1950s the newly-formed Japan Ground Self Defense Force received 246, which were used through to the 1970s, another chapter in the long story of the M4 Sherman.

■ M4A3E8 Sherman Specifications

- Length: 7,543.8mm ● Width: 2,997.2mm
 - Height: 2,971.8mm
 - Fully-Loaded Weight: 33,657 tons ● Crew: 5
 - Engine: Ford GAA 4-stroke V8 liquid-cooled gasoline engine
 - Maximum Output: 500hp (at 2,600rpm)
 - Maximum Speed: 41.8km/h
 - Range: 161km (road surfaces)
 - Armament: 76mm M1A1/M1A1C/M1A2 tank gun x1 & 71 rounds, M2 12.7mm heavy machine gun x1, M1919A4 7.62mm machine gun x2
 - Armor: 63.5mm (upper glacis), 50.8-107.95mm (lower glacis), 38.1mm (hull sides, rear), 88.9mm (mantlet), 63.5mm (turret front, rear, sides)

Hintergrund

Die USA waren etwas rückständig bei der Entwicklung neuer Panzer und die Prototypen der mittleren Panzer T3 und T4, welche in den 30er Jahren entwickelt wurden waren von der Basis her ein Design aus dem I. Weltkrieg. Erst mit dem M4 Sherman kam die USA zu einem eigenständigen mittleren Kampfpanzerentwurf. Er hatte seine Wurzeln im mittleren Panzer M2, der offiziell im Sommer 1939 vorgestellt wurde.

Obwohl er für die Massenproduktion gedacht war, zeigte die verheerend schnelle Eroberung Frankreichs durch die deutsche Wehrmacht im Juni 1940, dass der hohe Aufbau des M2 und seine 37mm Kanone veraltet waren. Die Alliierten brauchten einen Panzer, der in der Liga der 75mm Kanone des Panzer IV mitkämpfen konnte. Da keine Erfahrung in der Konstruktion von Drehtürmen vorlagen, drückten die US Entwickler die Wanne des M2 neu in die Nutzung, ausgerüstet mit einer 75mm Kanone in einem Erker rechts am Wannenbug. Unter der Bezeichnung M3 wurde er ab April 1941 produziert.

Verfolgungsjagd

Während der Lückenfüller M3 produziert wurde, wurde parallel ein neuer mittlerer Panzer entwickelt. Um Zeit bei der Entwicklung zu sparen, wurde die M3 Radauhängung, die Unterwanne und das Getriebe des M3 verwendet. Dazu kam ein neuer Drehturm für die 75mm Kanone und eine neue Oberwanne. Es ging sehr schnell voran vom Prototyp (September 1941) bis zur offiziellen Vorstellung des M4 (der Name Sherman wurde ihm von den Britischen Verbündeten verliehen) im Oktober 1941. Die Massenproduktion startete im Februar 1942. Die erste Variante M4A1 wurde mit der gegossenen Wanne gebaut. Es folgte die Variante des M4 mit der besser für die Serienproduktion geeigneten geschweißten Wanne. Beide nutzten den R975 Stammotor für Superbenzin. Mehrere Versionen des M4 kamen dann in die Produktion mit der geschweißten Wanne, sie nutzten verschiedene Motoren: der M4A2 hatte den General Motors 6046 Dieselmotor, der M4A3 trug den Ford GAA Benzinmotor und der M4A4 hatte den Chrysler Multibank Benzinmotor. Ein Panzer mit Hybridwanne aus geschweißten und gegossenen Teilen mit dem RD-1820 Stammotor wurde auch unter der Bezeichnung M4A6 gebaut.

Einige späte Shermans wurden mit der neuen 76mm Kanone gebaut und einem größeren Turm, der sie aufnehmen konnte. Die verkürzte und gewichtserleichterte Version der 3 Inch (76,2mm) Kanone aus dem Panzerjäger M10 konnte auf 914m 88mm einer um 30 Grad geneigten Panzerung durchschlagen, im Gegensatz zur alten Waffe, die nur 60mm schaffte.

Ein Easy Rider

Obwohl Zweifel an deren Notwendigkeit bestanden, wurden die M4A1, M4A2 und die M4A3 mit den 76mm Türmen ab Januar 1944 gebaut. Das

erste Aufeinandertreffen mit Panther und Tiger I nach der Landung in der Normandie im Juni 1944 wischte aber alle Zweifel hinweg und die Shermans mit 76mm Kanone wurden im Juli bei der Operation Cobra verwendet. Die größere Bewaffnung hatte ihren Preis und die Sherman mit den schwereren Türmen kämpften mit ihrer 16,5 inch (42cm) breiten Kette vor allem im Schlamm. Es wurden Interimslösungen verwendet, wie zum Beispiel die Version mit löffelartigen Endverbindern. Eine bessere Version war die breitere Kette mit 23 inch (58,4cm) und Front- und Seitenschürzen. Diese Panzer hatten auch die (HVSS) Aufhängung mit horizontalen Spiralfedern anstelle der alten VVSS Aufhängung mit senkrechten Federn. Durch die waagrechte Anbringung der Federn in jedem Lauftradwagen konnten doppelte Laufrollen verwendet werden und breitere Ketten. Zunächst war dies die T66 mit einfachen Bolzen und später die T80 Stahlkette mit Doppelbolzen, sowie die T84 Kette mit Gummierung. Zwischen März und August 1944 wurden 500 M4A3 mit der HVSS Aufhängung gebaut und ab November ausgeliefert. Bis April 1945 stieg die Zahl bis auf 2617 Panzer. Sie wurden bekannt als M4A3E8 und wegen der sanften Aufhängung „Easy Eight, genannt.

Der „Easy Eight“ im Einsatz

Am 22. Dezember 1944 wurde der „Easy Eight, bei der Ardennenoffensive erstmals eingesetzt. 21 Panzer waren bei der 4. Panzerdivision von General Pattons 3. Armee in Bastogne. Später wurden sie in größerer Zahl ausgeliefert: zur 1. Armee (258), zur 3. Armee (256), zur 9. Armee (214) und zur 15. Armee (24) unter dem Befehl von General Bradleys 12. Armeegruppe. Auch in Italien gab es einige Einsätze.

Das gute Design des Sherman wird durch seine lange Nutzungsdauer begrüßt, und seine letzte Variante der „Easy Eight, ist wohl die beste. Nach dem II. Weltkrieg wurden sie eingesetzt um im Korea Krieg die T34/85 der Nordkoreaner abzuwehren.

M4A3E8 Sherman technische Daten

- Länge: 7,543,8mm ● Breite: 2,997,2mm ● Höhe: 2,971,8mm
- Gefechtsgewicht: 33.657 tons ● Besatzung: 5
- Motor: Ford GAA 4 Zylinder V8 Benzinmotor
- Maximale Leistung: 500hp (bei 2.600rpm)
- Höchstgeschwindigkeit: 41,8km/h
- Fahrbereich: 161km (auf Strasse)
- Bewaffnung: 76mm M1A1/M1A1C/M1A2 Panzerkanone x1 & 71 Schuss, M2 12,7mm schweres Maschinengewehr x2, M1919A4 7,62mm Maschinengewehr x2
- Schutz: 63,5mm (Oberwanne), 50,8-107,95mm (Unterwanne), 38,1mm (Wannenseiten, Heck), 88,9mm (Rohrblende), 63,5mm (Turm vorne, hinten, Seiten)

Prise de Retard

Après la 1^{re} G.M., les Etats-Unis furent réticents à développer de nouveaux chars de combat ; de ce fait, les prototypes des tanks moyens T3 et T4 développés dans les années 1930 étaient encore inspirés des engins de la Grande Guerre. Cependant par la suite, avec le M4 Sherman, les américains disposèrent enfin d'un tank moyen efficace et endurant qui devint légendaire. Il puisait ses origines dans le tank moyen M2 mis au point à l'été 1939.

Bien que sa construction en série soit programmée, la conquête rapide et dévastatrice de la France par les forces allemandes en juin 1940 mit en évidence que le massif et haut M2 et son canon de 37mm étaient obsolètes. Les alliés avaient besoin d'un tank à la puissance de feu capable de rivaliser avec le canon de 75mm du Pz.Kpfw. IV allemand. Ne disposant pas de l'expérience du développement d'une tourelle rotative pour un canon d'un tel calibre, les concepteurs américains conservèrent la caisse du M2 sur laquelle ils installèrent un canon de 75mm en encorbellement. Désigné M3, ce véhicule entra en production en avril 1941.

Rattraper le temps Perdu : le Développement du Sherman

Pendant la production de la solution d'urgence M3, un nouveau char moyen était à l'étude. Pour gagner du temps, il utilisait la suspension, la caisse inférieure et la transmission du M3. La caisse supérieure et la tourelle entièrement rotative abritant un canon de 75mm étaient nouvelles. Peu de temps s'écoula entre l'apparition du prototype (septembre 1941), l'adoption de la désignation officielle M4 en octobre 1941 (ce sont les britanniques qui le dénommèrent ultérieurement Sherman) et le début de la production en série en février 1942. La première version produite fut le M4A1 à caisse moulée, suivi du M4 à caisse soudée accroître le rythme de production. Tous deux étaient équipés du moteur à essence radial R975. D'autres Sherman à caisse soudée suivirent, avec différents types de groupes propulseurs : le M4A2 avec un General Motors 6046 diesel ; le M4A3 avec un Ford GAA essence et le M4A4 avec un Chrysler essence multi-bancs. Une variante à caisse hybride moulée/soudée et moteur radial RD-1820 fut également produite sous la désignation M4A6.

Certains Sherman tardifs furent surarmés, avec un nouveau canon de 76mm dans une tourelle agrandie. Il s'agissait d'une version raccourcie et allégée du canon de 3-inch (76,2mm) du chasseur de chars M10. A 914m, il pouvait pénétrer 88mm de blindage incliné à 30°, comparé au canon de 75mm limité à 60mm.

Easy Rider

Malgré un certain scepticisme quant à leur utilité, des M4A1, M4A2 et M4A3 Sherman à tourelle de 76mm furent produits à partir de janvier 1944. La rencontre avec les Panther et Tiger I après le Débarquement de Normandie de juin 1944 leva tous les doutes et des Shermans à tourelle de 76mm furent engagés dans l'Opération Cobra en juillet suivant.

Cependant avec cette tourelle alourdie, les chenilles de 16,5-inch (42cm) étaient peu efficaces en terrain boueux. Des solutions temporaires comme des extensions de patins "duckbill" furent testées. Une autre solution, permanente cette fois, était l'installation de chenilles de 23-inch (58,4cm) avec des garde-boue élargis et des suspensions avec ressorts spiraux horizontaux (HVSS) à la place de l'arrangement vertical (VVSS) utilisé jusqu'alors. Le ressort spiral placé à l'horizontale de chaque bogie permettait l'adoption de roues de route jumelées et l'utilisation de chenilles plus larges, en premier le type T66 à connecteur unique puis le type T80 à connecteur double et le type T84 à revêtement caoutchouc. 500 M4A3 à suspension HVSS furent produits entre mars et août 1944 et livrés à partir de novembre, leur nombre passant à 2.617 en avril 1945. Ils étaient désignés M4A3E8, et plus communément surnommés "Easy Eight" du fait la souplesse de la suspension HVSS.

Le Easy Eight en Action

22 décembre 1944: c'est pendant la Bataille des Ardennes que le Easy Eight participe à ses premiers combats, plus précisément 21 engins de la 4^{re} Division Blindée de la 3^{re} Armée du Général Patton à Bastogne. Plus tard, des M4A3E8 furent déployés en plus grands nombres, dans la 1^{re} Armée (258), 3^{re} Armée (256), 9^{re} Armée (214) et 15^{re} Armée (24) sous les auspices du 12^{re} Groupe d'Armée du Général Bradley. D'autres servirent en Italie, de manière plus limitée. La conception endurante du Sherman est attestée par sa longue carrière, et sa version finale Easy Eight est sans doute la plus aboutie. Après la 2^{re} G.M., il fut déployé en Corée pour contrer l'avancée des T-34/85 des nord-coréens. Le Japon et le Easy Eight sont également liés puisque dans les années 1950, la Force d'Autodéfense Terrestre Japonaise nouvellement créée en reçut 246, utilisés jusqu'aux années 1970, un autre long chapitre de l'histoire du M4 Sherman.

Caractéristiques du M4A3E8 Sherman

- Longueur: 7,543,8mm ● Largeur: 2,997,2mm
- Hauteur: 2,971,8mm
- Poids en ordre de combat: 33.657 tonnes ● Equipage: 5
- Moteur: V8 Ford GAA 4 temps à essence refroidi par liquide
- Puissance maxi: 500cv (à 2.600trs/min.)
- Vitesse maxi: 41,8km/h ● Autonomie: 161km (sur route)
- Armement: Canon de 76mm M1A1/M1A1C/M1A2 x1 & 71 obus, mitrailleuse lourde M2 12,7mm x1, mitrailleuse M1919A4 7,62mm x2
- Blindage: 63,5mm (glacis supérieur), 50,8-107,95mm (glacis inférieur), 38,1mm (flancs et amère de caisse), 88,9mm (masque du canon), 63,5mm (tourelle)